ますます絡みついた腕が重くなる。
「おい……酔っているのか。水でも持って来ようか？」
ようやくグレイが眼を開いた。
「いらない」
潤んだ灰色の瞳。見つめながらガラハドの左頬の傷痕を熱の篭った指先で辿る。そのもどかしい感触にガラハドの身体の中から呼び起こされるものがあった。
相手は酔っているから。
そう心の中で唱え、衝動を抑えこもうとする。
グレイはあまり酒は飲まない。今日もそんなに量は口にしていないが、ガラハドに付き合って普段は飲まない強い酒を飲んでいた。
口当たりだけはいいから過ごしてしまったのかもしれないな。
「水と、何か酔いが醒めるようなものを持って来てやるよ」
だから手を離せ、と言おうとした唇を傷痕を撫でていた指がなぞる。まるで言葉を遮るように。
ガラハドの中の葛藤が激しくなった。体が縛り付けられたようになって動けない。
「鈍いな」
ようやくグレイが言葉を発した。
「俺が本当にそんなに酒が弱いと思っているのか？」
ガラハドの咽喉が鳴った。グレイがまた笑った。
「こういうことはいつも俺が酔ってる時ばかりじゃないか。気づいていないのか」
そうだったろうか。それでは、いつも酔ったふりをしていたということか。
顔をグレイのそれに近づける。お互いの息がかかる甘い距離。グレイはそれを受け止める。
「いいのか？」
「よくなきゃ誘ったりしない」
グレイは吐息だけで答えた。

唇を重ねると素直にそれに応じる。それを薄く開け、ガラハドの舌を待ち受けようとしていた。遠慮せず侵入する。柔らかく絡め取り、吸い上げる。